

# 譜代下人の自立と小農的「家」の成立

沼 田 誠

## 1. はじめに

本稿の課題は、ある訴訟文書を手がかりに、譜代下人の「自立」の様相と「自立」を通じて形成される「家」の在り方を、ライフ・サイクルを視点において検討することである。その文書は、『西宮市史第5巻 資料編2』（昭和38年、西宮市役所）に収められた「譜代下人出入文書三通（鳥飼よね文書）」である。この史料はこれまでも八木哲浩氏<sup>1)</sup>、佐々木潤之介氏<sup>2)</sup>、峰岸賢太郎氏<sup>3)</sup>によって取り上げられ、比較的知られた史料である。とくに佐々木潤之介氏は「小農」自立と関連させて、この史料を明瞭に位置づけている。本稿は佐々木氏によって検討された成果を出発点においているといわなければならないが、本稿と佐々木氏の視角との違いを求めるとするならば、譜代下人のライフ・サイクルに視点をおいて「家」の成立を検証することにあるといえるだろう。もちろん限られた個別資料から譜代下人の「自立」の様相を一般化することは必ずしもできないが、ひとつの典型的事例として評価しうることは間違いない。さらにいえば、これまで多くの論者によって蓄積されてきた「小農」自立論を「家」という場を通じて繰り返されるライフ・サイクルの視点から読み替えるという試みのひとつでもある。

ところで、取り上げる史料は鳥飼よね家所蔵になるものであり、寛文13年（1670）に起こった土地取り上げをめぐる訴訟一件についてのものであるが、三通の文書に分かれている。一通は訴えた側（譜代下人・善二郎）

の主張を示すものであり、他の二通は訴えられた側（庄屋・八兵衛）の返答である。両者の主張には明瞭な違いがあり、いずれの主張が事実を示すものであるか、判然としないという難点はあるものの、主張そのものには、以下に検討するように、当時の譜代下人と彼らを抱える親方<sup>4)</sup>の置かれた状況が反映していると見ることができるものである。訴訟当事者は摂津国武庫郡下瓦林村（現西宮市）庄屋八兵衛とその譜代下人・善二郎であり、八兵衛の所持する下新家村の高八石九斗四升一合の土地の取り上げをめぐって譜代下人・善二郎が奉行所に裁断を求めたのである。なお、下瓦林村は尼崎藩領内にあり、問題の土地が所在する下新家村は寛永14年（1637）に開発された久右衛門新田にあたる。『西宮市史第二巻』（昭和35年、西宮市役所）の口絵地図（寛延元年摂津名所大絵図）によれば、久右衛門新田が「下新ヤ」となっている。訴訟の対象となった土地が新田開発によって開かれたところであったことにひとまず注意しておこう。

以下、史料の全文を引用しておきたい。

#### 「譜代下人出入文書三通（鳥飼よね文書）」

##### <史料1>

乍恐謹て言上仕候

- 一 下新家村之田地高八石九斗四升一合之所、惣兵衛と申もの開申之所、梅窓院様御代ニ御意を背、地下中共ニ御払被為成候御事
- 一 彼惣兵衛兄弟に下瓦林庄や八兵衛と申もの、私親二郎右衛門と申ものへ被申候ハ、右之田地作立候て万事御役儀をも勤可申候、末々は私兄市兵衛と申ものニ右之田地とらせ可申候、為其にハ市兵衛を子分にして召使可申と、私親二郎右衛門と約束にて、幼少之時分より三八、九之年まで被召使候、右之田地八石九斗四升一合之内田中・出井口・長町・神崎道・戌亥方・玉子原・長町・門先・池の内・居屋敷以上

譜代下人の自立と小農的「家」の成立

十ヶ条五石九斗貳升貳合之所とらせ、新家村へ被仕付申候、残所ハ八兵衛隠居田地と被仕分候御事

- 一 私兄市兵衛実子無御座候故、私を子分に仕候処、九ヶ年以前ニ相果申候、然共私右之田地無相違作、御役儀をも勤申候御事
- 一 然所に庄や八兵衛ハ青山大膳様御百姓ニて御座候、拾四、五ヶ年以前ニ隠居仕候、只今ハ養子なから九左衛門庄や仕候、彼九左衛門私居申新家村之庄や・年寄をたまし、私ニ預ヶ田地と申手形を取可申知略仕候御事
- 一 右八石九斗四升一合之高、新家村初リ御役儀をも親兄弟まで久々相勤申候、彼九左衛門養子ニて候へとも大分之田地を取申候、わづかの田地隠居に取、剩隠居之御役儀をも私とも相勤、わづかの田地之内ニては難罷成候、其上十ヶ条之田地之内二ヶ条我かまゝ仕戻不申候、隠居地も二ヶ条、田地も壹かふ之内ニて候まゝ御慈悲ニ戻し申候様ニ八兵衛・九左衛門被召出被為仰付被為下候ハゝ難有可奉存候、以上

<史料 2>

下瓦林村庄屋九左衛門普代之下人

九左衛門下人

二郎右衛門

右二郎右衛門忒

甚 三 郎

右甚三郎弟

善 二 郎

- 一 下新家村八兵衛かぶ代役人下人二郎右衛門と申候者九年以前ニ新家村へ出し申候、御役儀之給分ニ田地三ヶ所作致させ申候、彼二郎右衛門年罷寄、忒甚三郎九左衛門方ニ四五年召遣候を拾七八年已前ニ新家村へ出し、御役儀之給分ニ田地拾ヶ所作致させ、拾ヶ所之田地ニて作

はい毎年米八斗宛九左衛門方へ取申候

- 一 甚三郎新家村へ出し申候時、弟善二郎普代筋目之通九左衛門方へ指越申候様ニと申候えハ、兄甚三郎申様、私病氣者ニて御座候間、本復仕候迄御待被下候えと申す候故、尤と存候て相待申候、其内甚三郎儀九年已前ニ相果申候
- 一 其砌代役仕候者方々相尋候え共、似合敷者無御座候故、彼善二郎新家村九左衛門家屋敷ニ指置、八九年以前寅卯兩年ハ田地壹反余作らせ、七年已前辰ノ年より去々年申ノ年迄五年之間田地四ヶ所作せ申候、又去年より二ヶ所増し以上六ヶ所御役目之給分ニ作致させ申候
- 一 右之外ニ田地門先・百間町二ヶ所式石式斗三升ニ定善二郎ニ当置申候、御役儀之給分ニ作せ申候、六ヶ所の田地も二ヶ所之当作も善二郎ニ致させ申候証文ニあきらかに御座候
- 一 二郎右衛門より善次郎ニ至迄、右之田地壹ヶ所も永作ニ取せ不申候証拠ニハ、新家村之水帳拾五年以前迄ハ追出され候者共之名前ニて御座候を、小松村□惣左衛門殿拾四年已前ニ田地御改被成、只今之百姓之名前ニ被成候、其砌甚三郎専新家村ニて作仕候え共、甚三郎と申候名前壹ヶ所も無御座候、悉我等名前ニて御座候、委ハ水帳・名寄帳ニあきらかに見へ申候
- 一 新家村しはい懸り物ニ至迄善二郎ニ出させ申候儀ハ毛頭無御座候、只今ニ至迄我等方より出し申候
- 一 善次郎我等之普代ニてハ無御座候由申上候、普代之証拠慥ニ御座候、其故ハ先年宗旨御改帳面ニ慥に御座候、則旦那寺ハ我等同寺ニて御座候
- 一 普代二郎右衛門義八兵衛他領七つ松より参候時、八兵衛親与兵衛方より右之二郎右衛門くれ申候、則二郎右衛門忝甚三郎七つ松与兵衛屋敷にて生れ申候、弟善次郎ハ瓦林村八兵衛屋敷ニて生れ申候

<史料3>

乍恐言上仕候返答

- 一 青山丹後守様御領知下瓦林村新家田畠高八石九斗四升老合、私之兄惣兵衛跡を 御公儀様より申請、只今至迄八兵衛作仕、毎年御年貢之仕払算用ニ私罷出相勤申候、善二郎義ハさん用場へ出申候儀少も無御坐候御事
- 一 私代々普代之下人ニ二郎右衛門と申候もの御坐候付て即新家村私之田畠御役儀等家守ニ出し置、田地字横枕・池之内・戌亥方以上三ヶ所作せ申候、然所ニ二郎右衛門年罷寄御役儀勤申候儀不罷成候付、次郎右衛門忤甚三郎私方ニ召遣候を、二郎右衛門右之仕合ニ御坐候故、彼甚三郎を新家村へ□候て田地、田中・でい口・長町・神崎道・戌亥方・玉子原・百間町・門先・池之内・屋敷以上拾ヶ所作せ、毎年作あい米八斗宛私方へ取申候、相残田地私方よりあて作ニ仕候処ニ右拾ヶ所之田地もらい申候なとゞ只今善二郎右押領を申上候、八兵衛方より甚三郎もらい申候証拠少ニても御坐候哉、善二郎并母被為 召出御尋被為成可被下候御事
- 一 甚三郎新家村へ出申候砌、弟善二郎を普代筋目之通ニ甚三郎替遣可申と申候へハ、其節甚三郎病氣故、御役義相勤候事難成候間、今少御待被下候へと種々申候故、病氣尤と存さし置申候内ニ甚三郎義相果申候付、彼善二郎を遣申度存候故、御役儀勤申候もの方々相尋候へ共似合敷もの無御坐候故、則善二郎ニ田地屋敷田・屋敷西うら田・石原田・塚口海道・横枕・戌亥方以上六ヶ所作せ申候ハ御役儀之給分ニ作せ申候、只今ニ至迄御役義勤させ申候、右六ヶ所之外ニ百間町・門先二ヶ所只今ニ至迄善二郎作仕候様ニ押領申上候、去ル酉ノ年迄年々小曾根村大郎兵衛と申者ニ私方よりあて作ニ仕置候、御年貢米作あい之様子庄や久右衛門ニ御尋被為 成可被下候、右之田地百間町老石四斗三升ニ究、門先八斗ニ究、当年より善二郎ニあて申候御事

一 去年六月ニ新家村新右衛門と申候もの私方へ申来候ハ善二郎ニ似合  
敷女房持せ候様ニと申候故、尤と存私方より相尋候へ共、可然者無御  
坐候故、新右衛門を頼可申と申候えハ、去方よりよび申筈ニ相究り候  
え共、我等普代之様子兄より具ニ聞届、指越不申候、其後当四月ニ塚  
口村より女房をよび申候、其節私方へうかゝい可申処ニ毛頭知せ不  
申、我か儘によひ申候故、背本意候段徒ものと存後日ニいか様之悪事  
をもたくミ可申哉と存、善二郎ニ預ヶ置候六ヶ所之田地・屋敷共ニ手  
形判形致させ取申候御事

一 九左衛門と甚三郎養子兄弟之様に申上候、大キ成偽リニて御座候、  
養子ノ証拠少ニても御坐候哉御尋被為 成可被下候、甚三郎儀代々私  
之普代之せうこ慥に御座候御事

右之通被為 聞召上、乍恐此已後私召遣申候男女普代之者共ためニて御  
坐候間、善二郎儀向後私方ニ召遣申候様ニ被為 仰付被下候ハ、難有奉  
存候、以上

下瓦林村

寛文拾年

八兵衛儀

六月九日

善介

同

九左衛門

進上

御奉行様

## 2. 訴訟一件の経緯

事件の内容を史料に即してできる限り再現することから始めよう。その  
際、先述したように、訴えた側の文書とそれに対する返答書とが残されて  
いるので（前者は＜史料1＞、後者は＜史料2＞＜史料3＞にあたる）、両

者を比較しながら検討することにしよう。

この訴訟は親子二代にわたる経緯を背景にしたものであるので、訴えた側と訴えられた側に登場する人物を明らかにしておけば、前者が二郎右衛門（親）→市兵衛（兄）→善二郎（訴訟当事者）であり、後者が八兵衛→九左衛門（養子）である。

訴訟をめぐる問題は29年前にさかのぼる。訴訟当事者である「私」（＜史料2＞では善二郎）の親である二郎右衛門とその親方であった庄屋八兵衛との間で次のような「約束」があったという。

- ①下新家村における土地（高八石九斗四升一合）の耕作が許されるとともに、八兵衛にかかる下新家村における「役儀」<sup>5)</sup>を代わって勤めること
- ②二郎右衛門の跡を市兵衛に「とらせ」ることを条件に、市兵衛を八兵衛の子分として召し使うこと

ところが、「約束」にもかかわらず、38、9歳まで「子分」として勤めた市兵衛が新家村に出たとき、与えられた土地は高五石九斗二升二合であった。およそ高三石余りの土地は、「八兵衛隠居田地」として割き取られてしまったのである。さらに残された田地10ヶ所のうち「我かまゝ」に二ヶ所まで引き上げられてしまった。善二郎としては「新家村初り御役儀をも親兄弟まで久々相勤」め、親の代からの「約束」を忠実に守ったにもかかわらずである。こうした土地取り上げに対して善二郎は「わづかの田地之内ニては難罷成」として「約束」通りの土地回復を求めたのである。ここで重要なことは善二郎の正当性の論理である。土地回復を求めるにあたっての正当性は、先ず第一に高八石九斗四升一合に関わる「役儀」を二郎右衛門から善二郎に至るまで勤めあげていること、第二に与えられるはずの土地を基盤にして始めて「生活」が成り立つとかがえていることにある。

しかもその土地を親兄弟にわたって継続的に耕作し続けてきたことを精神的支えにしてきたことによっている。言い換えれば、善二郎にとって「約束」通りの土地が与えられていたとすれば、公的な負担に耐え得る「百

姓」として「自立」できると認識していたといってもよい。こうした認識は善二郎が八兵衛の下で召し使われる経験を持たなかったという特殊事情も作用しているといえるが、善二郎にとって「我等之普代ニては無御坐候」（＜史料2＞）と意識されていたのである。

これに対して、訴えられた側の八兵衛（九左衛門）の返答は善二郎の認識と大きく異なるものであった。善二郎が「普代」ではないと言い切っているのに対して、八兵衛側は善二郎も含めて二郎右衛門親子が「私代々普代之下人」であることを前提にして論理を組み立てていた。二郎右衛門親子を「普代下人」とであると当然視するのは、八兵衛が「他領七つ松」から下瓦林村に入るに際して、二郎右衛門を「八兵衛親与兵衛方」が「くれ」たこと、また甚三郎（＜史料1＞では市兵衛、以下原則として＜史料2＞および＜史料3＞に基づく場合は甚三郎とするが、市兵衛と甚三郎が同一人物であること注意されたい）が与兵衛屋敷で生まれ、善二郎が八兵衛屋敷で生まれたことも、その理由になっていた。

寛文13年（1670）から29年前（寛永6年）に、譜代下人であった二郎右衛門を「八兵衛かぶ代役人」として下新家村に出した（＜史料3＞では「新家村之田畠御役儀等家守ニ出し置」とある）。その際、「役儀之給分」として田地3ヶ所の耕作を許した（この点、善二郎の認識と明らかに異なることに注意しておこう）。その後、二郎右衛門は「年罷寄」り、役儀を勤めることが困難になってきたため、これまで「私方ニ召遣候」甚三郎を新家村に出すことにした。甚三郎には改めて「役儀之給分」として田中・でい口・長町・神崎道・戌亥方・玉子原・百間町・門先・池之内・屋敷の10ヶ所の耕作を認めたのである（これは善二郎の主張と一致する）。ただし、この10ヶ所についてはすべて、「作あい」として反当八斗を取る「あて作」地であった。この点を八兵衛側が強調するのは、善二郎が高八石九斗四升一合の土地を「とらせ」という約束であったと主張したことに対する反論であることは言うまでもない。「拾ヶ所之田地もらい申候なとゞ只今



善二郎右押領を申上」げる根拠がないことを「あて作」という事実から明示させようとしたのである。

ところで、甚三郎が新家村に出たとき、本来「普代筋目之通」に弟善二郎が「九左衛門方へ指越」はずであったが（＜史料1＞によれば、甚三郎に「実子」がなかったため、弟が「子分」として召し使われることになったとある）、甚三郎は病気を理由にしばらく善二郎を召し使うことの猶予を願い出て、八兵衛側もそれを了解した。結果的に善二郎は八兵衛の下で「子分」として働かずに済むことになったのである。善二郎にとってみれば、このことは重要である。八兵衛家屋敷で生まれた善二郎であっても、実質的に八兵衛の下で働いた経験がなく、父親二郎右衛門とともに、新家村での生活と生産が善二郎の体験の大半を占めているとすれば、「譜代下人」であるという意識は、善二郎にとって希薄化することは自然の勢いともいえよう。

しかし、甚三郎は回復を見ないまま、寛文元年（1661）に病死してしまう。甚三郎に代わって実質的に「役儀」を勤めてきた善二郎は、当然このまま継続して善二郎が跡を引き継ぐと考えていたのに対して、八兵衛側は必ずしもそう考えてはいなかった。つまり「其砌代役仕候者方々相尋候え共、似合敷者無御座候」結果、善二郎に「役儀」を勤めさせ、「新家村九左衛門家屋敷ニ指置」いたと主張するのである。八兵衛側にとって善二郎を「新家村九左衛門家屋敷等家守」とするかどうかは、彼らの恣意に任されると認識していたといってもよい。こうした恣意性は「役儀之給分」として与えた土地に対しても同様であった。最初の2年間は一反余りの土地を与え、その後5年間はさらに4ヶ所、また去年からは2ヶ所を増し、都合8ヶ所の土地の耕作を「役儀之給分」として許したとするのである（ただし、＜史料3＞では、最初から6ヶ所の土地が宛行われている）。いうまでもなく、それらの土地は「当作」地であった。

なお、最後の2年間に「当置」かれた2ヶ所の土地について、興味深い

点があるので、一言しておきたい。＜史料3＞の八兵衛側の返答書によれば、この2ヶ所とは「百間町・門先」であった。この2ヶ所は「只今ニ至迄善二郎作仕候様ニ押領申上候、去ル酉ノ年（1669年：引用者）迄年々小曾根村大郎兵衛と申者ニ私方よりあて作ニ仕置」いたものであり、その様子は新家村庄屋久右衛門が知るところであるという。「役儀之給分」として与えられた土地についての両者の事実認識の違いを表にしたのが表1である。ここで注目したいのは百間町・門先の土地が甚三郎に与えられた土地であったということである。

表1 関係地の認識の違い

史料1	史料2・3			
		二郎右衛門	甚三郎	善二郎
	横枕	○		○
池の内	池之内	○	○	
戌亥方	戌亥方	○	○	○
田中	田中		○	
出井口	でい口		○	
神崎道	神崎道		○	
長町	長町		○	
玉子原	玉子原		○	
門先	門先		○	◎
居屋敷	屋敷		○	
長町	百間町		○	◎
	屋敷田			○
	屋敷西うら田			○
	石原田			○
	塚口海道			○

(注)◎印は「当作」、○印は「役儀の給分」。なお、＜史料1＞の「隠居田地」として割き取られた土地の字名はわからないので、表中には記していない。

表1によれば、八兵衛側は、「役儀之給分」として継続的に土地を与えていたわけではないと主張しようとしていたことは明らかである。しかし、注意したいのは、甚三郎に与えられた二ヶ所の土地を善二郎が「押領」していると八兵衛側が認識していることである。小曾根村の太郎兵衛に「あて作」させていたとするが、実際には善二郎が継続して耕作を続けていたのではないか。だからこそ、最終的には「当置」ではあれ、八兵衛側はそれを承認しなければならなかったのではないだろうか。この点は、土地に対する関係の仕方（耕作し続けるという事実の重み）とかかわって重要であるといわなければならない。

八兵衛側にとって、善二郎たちに与えた土地は決して「永作ニ取せ」たものではなかった。その根拠に「水帳・名寄帳」において八兵衛側が名請人になっていること、「支配懸り物」を一貫して納めていることをあげる。

「検地により土地所持は公儀のもとに編成され、中世的土地観念も大きく変容せざるをえなくなった<sup>6)</sup>」といわれるように、検地による名請は「百姓」としての正当性を公的に承認されることであった。こうした正当性を根拠にして八兵衛側は自らの論理を立てるのである。もちろん親方と譜代下人との関係を前提にしての「百姓」の論理であったことはいうまでもない。従って善二郎と八兵衛側の「百姓」として自らを位置づけることは共通しながらも、その論理は大きく異なっていた。両者の違いとして次の二点を指摘できよう。

第一に、善二郎の主張の根底には、「右之田地無相違作」と主張するように、親子二代にわたって同じ土地を継続して耕作してきたという自負があった。言い換えれば、善二郎にとって＜耕作する事実＞が高八石九斗四升一合の土地を「もらい」受けることの内実であり、「とらせ」ることの意味であった。それに対して、八兵衛側は「検地帳」に名請人として登録されていること、つまり土地所持者としての論理が働いているとあってよい。その限りで譜代下人に与えた土地に対して恣意的であることは何等問題さ

れないのである。

第二に、善二郎は、「わづかの田地之内ニては難罷」という主張が逆に裏打ちしているように、与えられた土地を継続的に耕作し続けることによって「百姓」としての生活・生産が可能であると考えていた。それに対して八兵衛側はあくまでも善二郎たちが「普代之下人」であり、与えた土地は「役儀之給分」として「当置」いたにすぎなかったと認識していたのである。親方の譜代に対する土地給付に過ぎなかった（内付関係）。

ところで、こうした訴訟の直接的契機は、以下にみる事件にあった。<sup>7)</sup>  
＜史料3＞の当該部分を引用しておこう。

去年六月ニ新家村新右衛門と申候もの私方へ申来候ハ善二郎ニ似合敷女房持せ候様ニと申候故、尤と存私方より相尋候へ共、可然者無御坐候故、新右衛門を頼可申と申候えハ、去方よりよび申筈ニ相究り候え共、我等普代之様子兄より具ニ聞届、指越不申候、其後当四月ニ塚口村より女房をよび申候、其節私方へうかゝい可申処ニ毛頭知せ不申、我か儘によひ申候故、背本意候段徒ものと存後日ニいか様之悪事をもたくミ可申哉と存、善二郎ニ預ヶ置候六ヶ所之田地・屋敷共ニ手形判形致させ取申候御事

善二郎と同じ村に住む新右衛門の斡旋によって、善二郎の結婚話が持ち上がった。親方としての八兵衛側は納得して、「去方よりよび申筈ニ相究」という段取りになったが、善二郎自身は納得せず、八兵衛方へ「指越」ことはなかった。それ以上に、「塚口村より女房をよび申候、其節私方へうかゝい可申処ニ毛頭知せ不申」という、八兵衛側にとって琴線にふれる行為に及んだのである。「我等之普代ニては無御坐」と思っている善二郎にしてみれば、親方である八兵衛に許可を得る必然性はなかったが、八兵衛側にとってはこれまでの慣習を破壊する行為に映ったに違いない。そこ

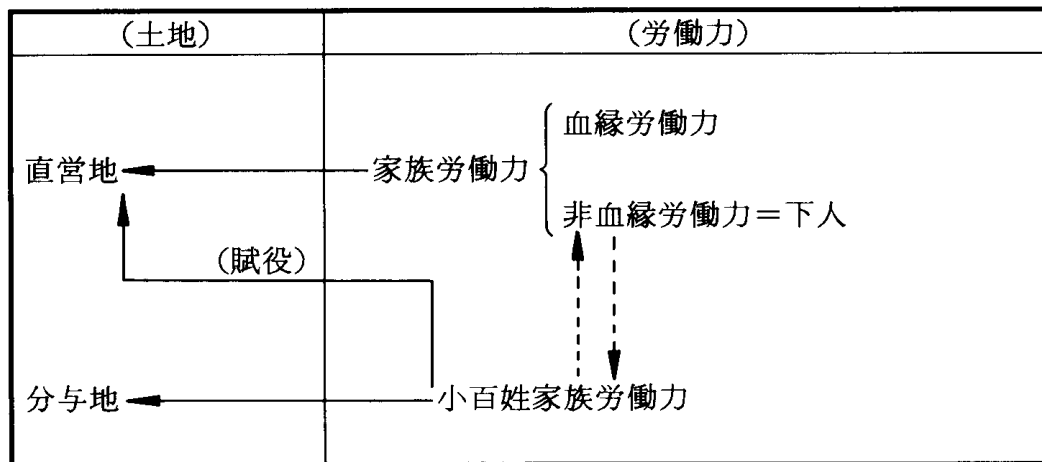
で、八兵衛側は「背本意候段徒ものと存後日ニいか様之悪事をもたくミ可申哉」と判断して、「善二郎ニ預ヶ置候六ヶ所之田地・屋敷共ニ手形判形致させ取申」という挙に出たのである。八兵衛の下で働いた経験もなく、「百姓」としての自負をもっている善二郎からすれば、結婚話にもわかに了解し難いことであっても、不思議はない。しかも土地引上がそのことによって持ち上がったとすれば、土地保全の要求をせざるを得なかったといわなければならない。その時、継続的なく耕作する事実<sup>8)</sup>を根拠にしつつ、二郎右衛門と八兵衛との約束を想起したに違いない。

### 3. 親方の労働組織の再生産と譜代下人のライフ・サイクル

以上のような経緯をもった事例は我々に多くのことを示唆してくれる。佐々木潤之介氏はこの事例を取り上げて「小農」自立の具体例とした。いうまでもなく佐々木氏の「小農」自立論は『小農』の自立してくる過程は、おそらく兵農分離の過程であり、「その過程では下人所有者を、農業の直接の労働過程——つまり自立していく譜代下人が行なう経営——から、その限りでは農業から切り離していくような形でしか、おそらく小百姓——下人の自立というの<sup>8)</sup>はありえない」ことを前提にしてのものである。佐々木氏はこの「下人所有者」の経営構造を次頁に掲げる図1のように図式化している。<sup>9)</sup>

「下人所有者」の経営構造を図1の如く整理した佐々木氏によれば、土地は直営地（手作地）と分与地に区別され、直営地には血縁労働力と非血縁労働力である下人の労働力および小百姓から調達される賦役としての労働力が組織される。本稿ではこれを柳田国男氏の指摘<sup>10)</sup>に従って「労働組織」（経営管理者としてのオヤと労働単位としてのコによる組織体）と呼ぶことにしよう。

図1 「下人所有者」の経営構造

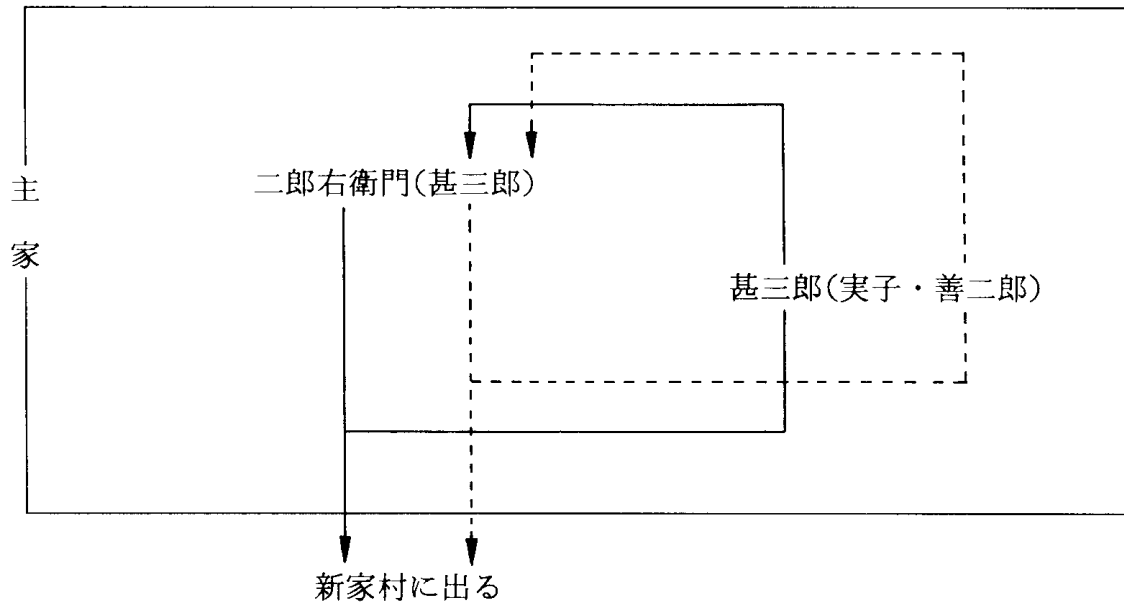


他方、分与地においては下人から上昇した小百姓の家族労働力が投入される。こうした図式を描く佐々木氏に注目すべきは次の点である。すなわち佐々木氏によれば、「下人⇄小百姓の動向が、この経営を支えていた」が故に、こうした構造が解体するのは「小百姓の自立」しかない、言い換えれば、「事がらの本質的变化は、小百姓が名主との間の関係を変質させることによってしかもたらされない」とする点に注目すべきである。葉山禎作氏がこうした「下人所有者」の経営を「徭役労働大経営」(←「下人労働大経営」)と規定して、「徭役労働大経営」と「小農経営」の並存状況と前者の解体傾向を指摘していることも想起しておこう。<sup>11)</sup>

これまで見てきた事例が、こうした経営構造に関連することはいうまでもない。「下人⇄小百姓の動向」が「下人所有者」の経営構造を支えもするし、解体させる原動力になるという佐々木氏の指摘は本稿の出発点になるが、本稿においては「下人⇄小百姓の動向」を「下人」・「小百姓」のライフ・サイクルに即しつつ、「小農」的家の成立に関連させて検討してみることに関心の中心に据えることにしよう。

二郎右衛門から甚三郎・善二郎まで約30年間の簡単なライフ・サイクルを描くことは可能である。それを図式化したのが図2である。

図2 八兵衛家の譜代下人構造



すでに指摘したように、＜史料2＞によれば、八兵衛は、他領七つ松より下瓦林村庄屋の家に入った（婿養子か）。その折、二郎右衛門家族も譜代下人として八兵衛と連れだってやってきた。その時期は不明であるが、承応2年（1656）頃、甚三郎が38、9歳であり、七つ松時代に既に生まれていたことを考慮すれば、承応2年からさか上ること、40年を越えることは決していない。とすれば、元和年間（1610年代後半）のことになるだろう。以来、二郎右衛門家族は八兵衛家屋敷に住まい、八兵衛家の労働組織の一員として労働に励むことになる。そして、寛永18年（1641）、二郎右衛門は八兵衛によって下新家村に出されるのである。二郎右衛門が八兵衛家屋敷にいたのは20数年ということになる。その間、甚三郎も八兵衛の労働組織の一員として既に働いていたことは明らかである。二郎右衛門が新家村に出されたとき、甚三郎は26歳になっている。甚三郎は八兵衛の下で24、5年間、「子分」として召し使われていたのであるから、ほぼ14、5歳の頃から八兵衛の労働組織に配されていたと見てよいだろう。二郎右衛門と甚三郎および甚三郎と善二郎の関係をライフ・サイクルに即して検討すると、興味深

い事実が浮かび上がってくる。二郎右衛門が何歳で新家村に出されたのかわからないのが、難点であるが、二郎右衛門が八兵衛家屋敷に居た期間が20数年であること、また既に子供（甚三郎）をもうけていたことを考慮すれば、50歳前後に出された可能性は高い。その時、甚三郎は26歳であった。後述するように、有賀喜左衛門氏は、名子が親方の下から「独立」するのは、慣習として14, 5歳の頃から主家に「奉公」した後の40歳前後であったと指摘する点に注目すれば、二郎右衛門の年齢は、指摘される年齢とは10歳近くの隔たりがある。しかし、甚三郎の「子分」としての期間が24, 5年で、新家村に出されたのが38, 9歳であったことは、有賀氏の指摘通り、甚三郎が40歳前後で「独立」を果たしていることになる。実は二郎右衛門と甚三郎のそれぞれのライフ・サイクルに即してみると、二郎右衛門の「独立」（新家村に出ること）後に甚三郎が召し使われる期間は12年前後で、通常より10年以上短くなっている。つまり、ちょうど10年ほどのズレが二郎右衛門にも甚三郎にもあった訳である。こうしたズレがなぜ生まれたのか、その理由は必ずしも明らかではないが、久右衛門新田の開発が寛永14年（1637）であったことと関係するかもしれない。とはいえ「独立」するに際して、その実子が親方の家屋敷にとどまることが二郎右衛門と市兵衛の間に見られることは注目しなければならない（図中の実線矢印がこれにあたる）。同様に市兵衛が「独立」するに際して、本来は「実子」であるが、「実子」がなかったため善二郎が「子分」として召し使われるはずであったように（図中の破線矢印）、「独立」することが「子分」になることと連動しているのである。言い換えれば、こうして譜代の親と子の関係が「独立」と「子分」の関係を繰り返すことによって八兵衛の労働組織は再生産されることになる。佐々木氏の指摘する「下人⇄小百姓の動向」を譜代下人側のライフ・サイクルに即して読み換えれば、こうした「独立」と「子分」の関係の再生産を意味するのである。峰岸賢太郎は次の指摘はこれに関連する。「下人⇄門屋（名子・譜代家持・家持下人）の循環が存在



し、かつその循環は譜代の者（下人と門屋）に対する支配において本来的に存在していたものと推定される。そして門屋・名子の家は、主家にとっての下人の再生産の場としての役割をも負わせられていたのであり、それは門屋・名子の果たすべき義務となっていたのである」<sup>12)</sup>。峰岸氏の指摘する「循環」は譜代下人側のライフ・サイクルの「循環」を意味しよう。その際注意しなければならないことは、八兵衛側にとって、「子分」として召し使うことが「譜代之筋目通」であると同様に、「独立」を認めることは親方の「慣習」（無言の強制力）が働いていたと見なければならない点である。<sup>13)</sup>と同時に、「独立」は、その都度親方によって承認されることによって、改めて実現されることも注意しなければならない（実質的に親子の継承関係があったとしても、親方側からみれば、「子分」として精励した証として「独立」が意味をもつ）。

とすれば、「下人所有者」の経営構造を解体させる動きを、ライフ・サイクルの視点からどのようにとらえることができるだろうか。

まず個別の事情が働いていることに注意しなければならない。善二郎はいくつかの偶然が重なって、「子分」として召し使われる機会をもたずに済んだことが大きく作用している。先に注12で引用しておいた宝永5年（1708）の相州津久井郡牧野村の「大久和神原家代々掟之事」では、「譜代者」に対していくつか規定されているが、そのなかの一つに「譜代者之男子幾人致出生候共、不殘可為譜代」とする規定がある。時期も地域も異なるとはいえ、「譜代」の男子は残らず「譜代」として主家に勤めなければならない慣行があるとすれば、善二郎も「子分」として残らなければならないはずである。しかし、善二郎は二郎右衛門とともに新家村に出ることとそれを免れているのである。しかし、甚三郎が新家村に出されるとき、本来は「実子」が残されることになるはずであったが、「実子」がいなかったために善二郎が「子分」として召し使われることになる。ところが、甚三郎の病気という偶然によって善二郎は「子分」として召し使われ

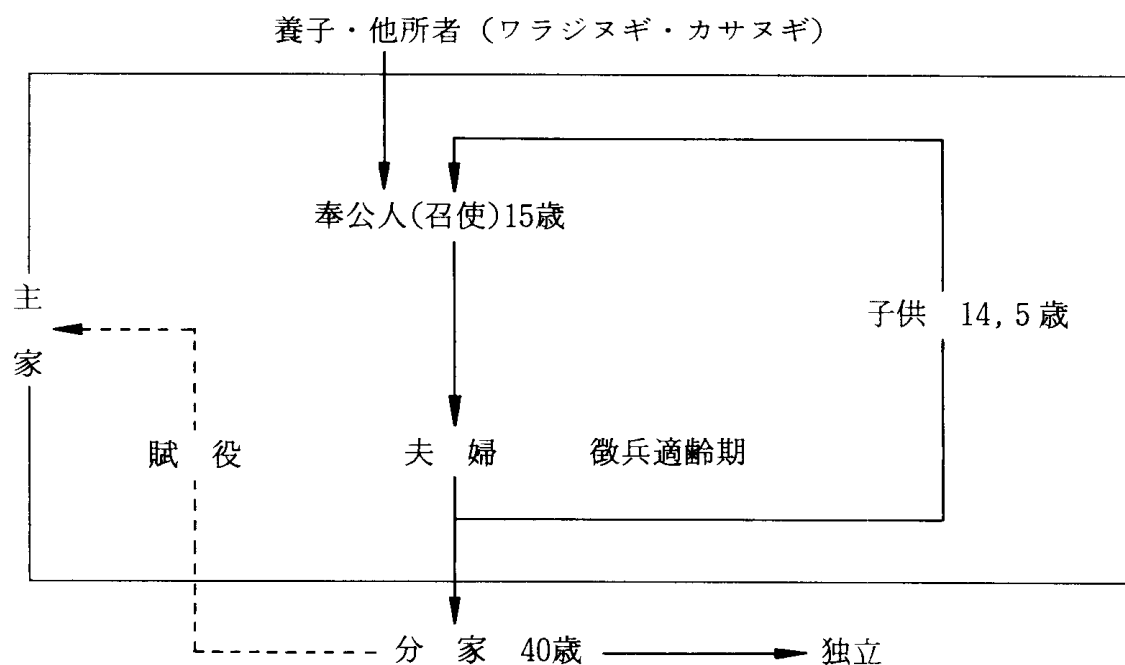
ることを免れることができたのである。偶然の重なりの中かでとはいえ、善二郎が「子分」として召し使われなかったという事実は重要である。「独立」と「子分」という「循環」に善二郎が組み込まれなかったことを意味するからである。言い換えれば、二郎右衛門とともに新家村に出て、二郎右衛門のリタイアに伴って二郎右衛門の跡を直接継承することができたのである。もちろん偶然が大きく作用しているとはいえ、親の跡を継承した善二郎にとって、与えられた土地を基盤にして生活と生産が可能であるという自負があったことが前提であったことはいうまでもない。

「独立」が「子分」として精励した証である限り、親と子の継承関係ではなく、親方と譜代下人の関係によってそれは実現するのである。しかし、善二郎の置かれた位置は親と子の継承関係によって創り出されたともいえるのである。この違いは結果的には同じでも「独立」した「家」を考える場合、大きな違いがあると見なければならない。「家」をめぐる親と子の継承関係が可能になることを通じて「家の存続」が現実性をもつものであるとすれば、こうした善二郎のような行動が「下人⇄小百姓」の再生産を断ち切る重要な契機になるし、「下人所有者」の経営構造を解体させる深部での動きを創り出し、「下人所有者」の「家」とは異なる「家」を創出させることになるのである（こうして創出された「家」を小農的「家」と呼ぶことができるだろう）。善二郎の在り方は偶然がそうさせたともいえるが、それが単なる偶然ではなかったことは、八兵衛側の危機感によく表れている。八兵衛側は奉行所に対して返答するなかで、最後に「乍恐此已後私召遣申候男女普代之者共之ためニて御坐候間、善二郎儀向後私方ニ召遣申候様ニ被為 仰付被下候ハ難有可奉存候」という文言を記している。こうした善二郎の行動がひとり善二郎のものではなく、「私召遣申候男女普代之者共」に深く影響しうることを察知しての表明であったことは間違いない。

ところで、「下人所有者」の「家」と小農的「家」の関係については、す

でに戦前期において有賀喜左衛門氏によって整理されていることをつけ加えておかなければならない。<sup>14)</sup> 有賀氏の「家」論については以前に検討したことがあるので、<sup>15)</sup>それを参照してもらいたいが、ここでは次の点だけ指摘しておきたい。先に掲げた図2とほぼ同様の図式を既に有賀氏が想定していた点である。

図3 奉公人分家と奉公人の関係



有賀氏が事例のひとつとして取り上げた青森県三戸郡階上村の正部家<sup>16)</sup>の事例から上図を検討しよう。もちろん有賀氏が、この事例を唯一の事例として取り上げたわけではないことはいうまでもない。

正部家家では名子が分家するに際して「ソノ二三男又ハ女子ヲ将来名子トシテ分家セシムル予定ノ下ニ正部家氏方ニ残シ置キコノモノハ十五六歳或ハ尋常小学卒業後僕婢トシテ主家正部家氏ニ仕ヘ」る。男子は徴兵適齢期前後、女子は18, 9歳に達すると、主家が「一切ノ経費ヲ負担シ適當ナル

配偶者ヲ求メテ結婚」させる。結婚後もしばらく「夫婦共僕婢トシテ相変ラズ奉公」して、寝室として「寝部屋」が与えられる<sup>17)</sup>。またその子どもが14, 5歳になると、その子どもには別の「寝部屋」が与えられる。その後、「古参順序ニ『台所頭』を経験することで、40歳あるいは45歳にて「分家」させられる。分家に際して、「地頭ヨリ宅地二三十坪内外ノ萱葺家屋ヲ新築シ、畑二三町（従前畑ノ極メテ多カリシトキハ七町歩ニモ及ベリ）ヲ無料ニテ貸付ケ、公租公課ノミヲ名子ニ於テ負担ス<sup>18)</sup>」るのである。

有賀氏の指摘する主家の奉公人と奉公人分家の関係は、これまで検討してきた事例と酷似した構造をもっていたことは明らかであろう。またこれに関連して有賀氏が「大家の召使は分家して名子となるが、これらは通常名子の子弟が大家の召使となるのであり、名子の家を嗣ぐべき長男もいったん大家の召使となり分家名子の形で自己の家に入る。実父から直接に相続の形態をとらない<sup>19)</sup>」と指摘する点は重要である。つまり主家と名子との関係を前提として「分家」が実現されるのであって、決して「実父から直接に相続する形態をとらない」ことが、両者の関係において注意されなければならないのである。これを逆に考えれば、両者の関係が解体する方向に作用させる力は「実父から直接相続する形態」に転換することにあるといえるのである。いわばそのことによって譜代下人の自立とともに小農的「家」の形成が現実性をもつことになるといえるのである。善二郎の行動もまさにそうした在り方を体現したものいえよう。

#### 4. おわりに

以上、限定された史料に基づいたものであるとはいえ、譜代下人の自立の様相を、そのライフ・サイクルの視点から検討してきた。善二郎の行動が寛文期であったことは興味深い。寛文延宝期は、畿内を中心として小農経営が大きく展開し、譜代下人を抱える「徭役労働大経営」が解体の傾向

を見せる時期にあたることが多くの論者によって指摘されているからである。先に指摘した葉山禎作氏もそのひとりである。また、近世初期の「家父長制的複合大家族」という存在に対して「いくつかの世帯が農耕の単位としてまとまった、屋敷地を核とする集団と考えるべきである<sup>20)</sup>」として、「家族（世帯）」と「経営」の区別を提起する斎藤修氏の次の指摘もこれに関連しよう。「数世帯からなる農業経営集団は解体し、直系家族型のライフサイクルをもった親族世帯がひとつの農業経営体として登場する。すなわち、真の変化とは、生態学的変化に対応した農業経営構造のそれであった。それまで家族の単位と農業経営の単位とは別個のものであったが、この変化の帰結として、両者は重なりあうものとなったのである<sup>21)</sup>」。斎藤氏のいう「数世帯からなる農業経営集団」とは、本稿で問題にしてきた親方（佐々木潤之介氏の「下人所有者」）の経営にあたるだろう。また善二郎が実現しようとした小農的「家」が「直系家族型のライフサイクルをもった親族世帯」を意味するといえよう。こうした時期に、善二郎が主家・八兵衛側を領主に訴え出したことは、単なる偶然が善二郎を動かしたとはもはやいえないだろう。善二郎の行動を、小農的「家」の一般的形成という時代の動きが下支えしていたといわなければならないのである。またこうした時代の動きを深部で規定するはずである「耕作する事実」がどのような形で社会的に承認されるようになるか、次の課題として問題になるだろう。

注 1) 『西宮市史第二巻』（昭和35年、西宮市役所）第3章(2)「近世初期村落の構造」において関説している。またこれに関連して今井林太郎・八木哲浩『封建社会の農村構造』（昭和30年、有斐閣）も参照されたい。

2) 「『小農』の自立」（佐々木潤之介編『シンポジウム日本歴史11 幕藩体制論』、昭和49年、学生社）。

3) 「近世前期の門屋・名子制」（『近世身分論』、平成元年、校倉書房）。

4) 「譜代下人」を抱えるような存在を、これまで「家父長制的複合家族」、「徭役労働大経営」等の概念によってとらえられることが多いが、以下で

は、有賀喜左衛門氏の用いる「親方」という用語を使うことにする。

- 5) この地域では近世初期より本役人、半役人、隠居、柄在家、下人の身分が定められていたが、農民が負担する諸役・諸懸のうち、少なくとも夫役負担の大部分は役人のみで追うべきものとされていた。またたとえ領主が村々に対して村高に応じて高割で役を割り付けたとしても、村内においては役人家別割で、持高の多少に関わらず本役人が一、半役人が〇・五の割で均等に負担していたとされる。「役儀」とはこの負担のことである。以上、『西宮市史第二巻』121頁による。
- 6) 白川部達夫「近世質地請戻し慣行と百姓高所持」(『歴史学研究』第552号、昭和61年)。
- 7) 峰岸賢太郎氏もこの点に注目して、次の3点を確認している。(イ) 善二郎が結婚にあたって「普代」の者を理由とする差別をうけ、その結婚が不成立に終わったこと、(ロ)「普代」の者は結婚は、主家の指示・斡旋・許諾を得て行なうべきことが原則にされていること、(ハ) 善二郎は主家の許諾を得ずに結婚を敢行し、善二郎のその行為が宛行った田地・屋敷について善二郎の所持権要求にまで及ぶとの危機感を九左衛門に抱かせたこと(前掲書145頁)。ただし、(ロ)や(ハ)についてはともかく(イ)の確認は問題があろう。少なくとも史料に即してみる限り、「地域農民からうけた結婚差別」(同上145頁)を確認することはできない。
- 8) 佐々木潤之介前掲報告34-35頁。
- 9) 佐々木潤之介『幕藩制国家論 上』(東京大学出版会、昭和59年)242頁。以下の引用も同じ。
- 10) 柳田国男『家閑談』(『定本柳田国男集』第15巻、筑摩書房)。
- 11) 葉山禎作「近世前期の農業生産と農民生活」(『岩波講座日本歴史10近世2』、昭和50年)。
- 12) 峰岸前掲書148頁。なお、峰岸氏はこうした「循環」についての事例として相州津久井郡牧野村の「大久和神原家代々掟之事」(宝永5年)を取り上げているので、本稿にも充分関連するものであるといえるので、参考のため、その史料の一部を以下に掲げておこう。

一譜代者之男子幾人致出生候共、不殘可為譜代、家持之妻・嫁從他来候共、大久和江入候分者不苦事、  
一譜代家持共之男子雖為幼少、主人之用事次第不殘可召仕、但、從十六歲不斷可勤勞事、  
一譜代家持致死去、子共幼少之奉公於不成者、給地半分取上之、令成人勤仕候者給畠可返之事、  
一譜代家持令絶殄者、於台所譜代男子之中遂吟味、前々家持ち子孫可仕付之事、(『神奈川県史 史料編6近世(3)』、昭和48年、神奈川県、832-833頁)

- 13) この点は、後述する有賀喜左衛門氏が強調する点でもあり、重要な論点とすべきであろう。たとえば、有賀氏が「分家」慣習にふれるなかで、「この慣習が存在した限り、社会的に承認されたし、それが主人をしてこれを行うように強制したのであった。だから主人がこの慣習に従わないことは、主人の信用を落とす結果となった」という指摘を見よ（『家（「日本の家族」改題）』，昭和47年，至文堂，112頁）。
- 14) 有賀喜左衛門『日本家族制度と小作制度』（『有賀喜左衛門著作集』第1巻，第2巻，昭和41年，未来社）。なお，この大著は『農村社会の研究』（←「賦役の研究」）の改訂である。
- 15) 沼田誠「有賀喜左衛門の『家』論の位相」（『神奈川大学評論 5』，平成元年）。
- 16) 農林省農務局『旧南部領ニ於ケル名子及之ニ類似ノ制度』（昭和11年）89－93頁。
- 17) 以上同上91頁。
- 18) 以上同上92頁。
- 19) 有賀前掲書（第1巻）356頁。なお，関連して『大家族制度と名子制度——南部二戸郡石神村に於ける——』（『有賀喜左衛門著作集』第3巻，昭和42年，未来社）も参照。
- 20) 斉藤修「大開墾・人口・小農経済」（『日本経済史1 経済社会の成立』，昭和63年，岩波書店）195－196頁。
- 21) 同上198頁。